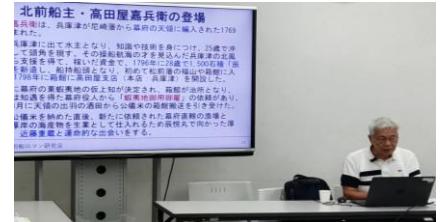


# 西神ニュータウン研究会 会報

第251号 2025年10月

## ■第251回例会記録

- ・日 時 2025年9月18日(木) 18:00~19:50
- ・場 所 神戸市外国語大学サテライトセミナー室B
- ・参 加 25名
- ・テーマ 北前船のロマン(その2)~国境の島・択捉島死守に奮闘した高田屋嘉兵衛~
- ・講演者 中山尚憲氏(北前船ロマン研究会代表)



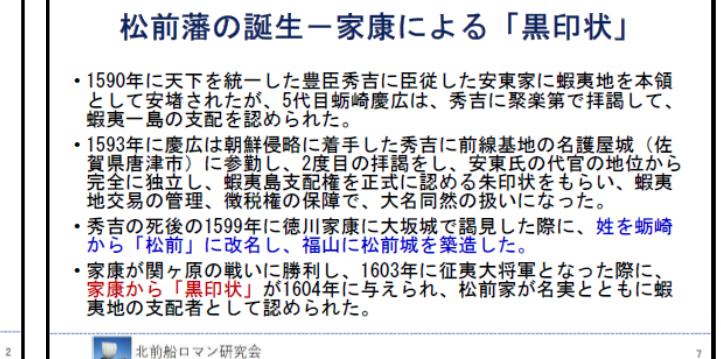
### □講演概要

1. 江戸時代までの蝦夷地と日本との関係
2. 松前藩の誕生とアイヌとの関係

#### 江戸時代までの蝦夷地との歴史的関係

- ・蝦夷地と東北地方との交流は縄文時代から続いている。
- ・平安時代は本土と蝦夷地が津軽海峡によって完全に分離され、蝦夷地の西南端に和人が居住して、それより北はアイヌ人が原始的な生活をしていた。
- ・日本の支配領域は、「稻作社会」（米で納税できる）に編入できる津軽が最北端とされた。
- ・それ以北は「外」、すなわち「異域」とされ、「夷」「蝦夷（エミシ/エゾ）」は古来以来、日本の外にあって日本が服従させるべき対象にした呼称だった。

北前船ロマン研究会



#### 松前藩の誕生一家康による「黒印状」

- ・1590年に天下を統一した豊臣秀吉に臣従した安東家に蝦夷地を本領として安堵されたが、5代目蛎崎慶広は、秀吉に聚楽第で拝謁して、蝦夷一島の支配を認められた。
- ・1593年に慶広は朝鮮侵略に着手した秀吉に前線基地の名護屋城（佐賀県唐津市）に参勤し、2度目の拝謁をし、安東氏の代官の地位から完全に独立し、蝦夷島支配権を正式に認める朱印状をもらい、蝦夷地交易の管理、徵税権の保障で、大名同然の扱いになった。
- ・秀吉の死後の1599年に徳川家康に大坂城で謁見した際に、姓を蛎崎から「松前」に改名し、福山に松前城を築造した。
- ・家康が関ヶ原の戦いに勝利し、1603年に征夷大將軍となつた際に、家康から「黒印状」が1604年に与えられ、松前家が名実とともに蝦夷地の支配者として認められた。

北前船ロマン研究会

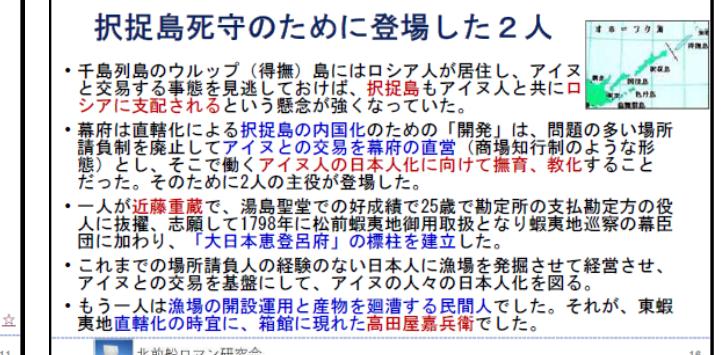
### 3. ロシアの日本への急接近

### 4. 幕府の蝦夷地択捉島死守のために活躍した人びと

#### ロシアの日本への関心の高まりと接近

- ・日本の情報は、唯一の海外の窓口であるオランダから得た。
- ・詳しい情報は、1699年に江戸からの荷を輸送中に暴風に遭い、カムチャッカに漂流した大坂の谷町の質屋の若旦那の伝兵衛からの情報でした。1702年にピョートル大帝が、日本国皇帝（將軍）の宮殿や、金や銀のこと等を長時間にわたって聴取した。大帝から「日本からの漂流民を見つければ首都に連れてくるように」との命令が出された。
- ・ロシアは、東方の海を探検させて、カムチャッカ半島の南端の海に数個の島が浮かんでいることを1728年に望見した。さらに、日本への航路を見つけよとの命令で、1738年に仙台沖に達し、漁民と派遣された藩士と船上で会い、日本への航路を確認した。
- ・一方、千島列島の探検は、毛皮資源のラッコの捕獲を、原住民に捕獲させながら進めたので、択捉島に到達できたの1767年だった。

北前船ロマン研究会



#### 択捉島死守のために登場した2人

- ・千島列島のウルップ（得撫）島にはロシア人が居住し、アイヌと交易する事態を見れば、択捉島もアイヌと共にロシアに支配されるといえ懸念が強くなっていた。
- ・幕府は直轄化による択捉島の内国化のための「開発」は、問題の多い場所で負制を廃止してアイヌとの交易を幕府の直営（商場知行制のような形態）とし、そこで働くアイヌ人の日本化に向けて撫育、教化することだった。そのために2人の主役が登場した。
- ・一人が近藤重蔵で、湯島聖堂での好成績で25歳で勘定所の支払勘定方の役人に抜擢、志願して1798年に松前蝦夷地御用取扱となり蝦夷地巡査の幕臣団に加わり、「大日本恵登呂府」の標柱を建立した。
- ・これまでの場所諸負人の経験のない日本人に漁場を発掘させて経営させ、アイヌとの交易を基盤にして、アイヌの人々の日本化を図る。
- ・もう一人は漁場の開設運用と産物を運搬する民間人でした。それが、東蝦夷地直轄化の時宜に、箱館に現れた高田屋嘉兵衛でした。

北前船ロマン研究会

#### 重蔵から嘉兵衛に依頼事項

- ・既に択捉島で見聞した、重蔵の課せられた責任は、漁場の経営や警備のための人員や、漁具等を大量に輸送する廻船の派遣の開発計画を立てることでした。
- ・課題は、国後島と択捉島の間の幅5里の国後水道で、濃霧が続き、潮流は早く(5リット= 9km/h)、風浪(高さ5m)が相せめき合い、凄まじい難所を渡る安全な水路と航法を発見が不可欠でした。
- ・重蔵は嘉兵衛が優れた船頭であることを聞いていたので、安全な水路の開拓を依頼したのでした。
- ・嘉兵衛はひるむことなく快諾し、水道が見渡せる山の頂上に上り、早朝から日没近くまで何日も根気よく波の動静や順逆を見続けた。
- ・結果、小さな水道（海峡）を流れる潮目の往来や緩急が幾度か変わることを発見し、70石積みの官船で渡った。

北前船ロマン研究会



#### 参考図

現在のロシアの地形図

オホーツク海周辺の地形図

R10 R11 R18 R21

30

## 5. ゴローニン事件と高田屋嘉兵衛の活躍

### 高田屋は東蝦夷地での最大の場所請負人へ

- 嘉兵衛は民間の拠点島開発の功労者だけでなく、蝦夷地常雇船頭として、拠点島や國後島等への輸送の責任者として責任を果たし、1806年には幕府より蝦夷地御用取扱人（物産売捌方）に指名され、蝦夷地の物産の販売の責任者にもなった。
- さらに、1800年の漁場の新規開発以来採用してきた「直捌制」が、幕府の持ち出しが多く負担も重なるために、1813年に商人の請負制に転換することとなりました。嘉兵衛には他の場所より早い1810年に拠点場所を使命として請け負わせることが決定された。
- 高田屋はその後、**拠点だけではなく、根室、幌泉の場所を請け負い、東蝦夷地での最大の場所請負人**（漁場を經營し、アイヌと交易し、運上金を藩や国に納める）となった。
- 高田屋は**大型北前船10隻を建造し、兵庫の本店の他、大坂、江戸、箱館に支店を置き、東北、北海道（蝦夷地）との交易で一代を築き、蝦夷地の産物は自家前の北前船で兵庫津に大量に運んだことで、一躍豪商にのし上がった**だけではなく、**兵庫津の繁栄**を極限にまで高めた。

北前船ロマン研究会

22

### ロシアからの新たな使節とその結果

- ロシアから日本に通商（基本は食料の購入）を求めて第1弾の使節団が訪れた12年後の1804年9月、幕府が与えた入港許可書「信牌」を携え、皇帝の国書を捧持して、幕府が指定した長崎に第2弾のロシア使節（レザノフの一行）が現れた。
- 国書を受けとれば儀礼上、返答使節をロシアに送らなければならず、鎖国は崩れることがあります。対応に悩んだ幕府は、回答をするとすると伸びし、使節団を長崎に半年間留め置き、その間は一切の火器は日本側が預かり、出港時に返すという友好国オランダ船に対する処置を強制するなど、その場の方策を取った。
- 半年も幽閉しながらの状態で待たされたレザノフに手渡された「教諭書」で、通商拒絶と国外への強制退放を命じられた。
- レザノフは、皇帝に約束してきた通商開始の目的は果たせず、長崎を退去するしかない仕打ちを受けたことに激しく憤り、武力による威嚇で、対日通商を実現しようと試みます。軍人でもあったので、配下の海軍士官ヴァオスト大尉に対して日本への攻撃を命じた。

北前船ロマン研究会

23

### 高田屋嘉兵衛の運命を変えたゴローニン事件

- 1807年の拠点島襲撃後の生々しい記憶の中で、幕府側は厳戒態勢継続中。1811年にロシア船ディアナ号の艦長ゴローニンは、オホーツク艦隊に必需品の補給と、北太平洋海域での地理調査を実施。
- 7月に國後島で尽きた水と食料の補給を得ようと艦船は沖に碇泊させ、ボートに士官、通訳ら7人で上陸し、交渉しようとした際に、幕府の警備隊はゴローニンらを拿捕した。
- ディアナ号の副艦長リコルドは、開放の交渉しようと艦を陸に近づけるが、砲撃を受け断念し、一旦オホーツクに戻り、1812年に再度國後沖に碇泊して交渉を試みたが、幕府側は拒否した。
- 困り果てたリコルドは、國後島沖の海上を通りかかる日本船を捕らえてゴローニンら同胞の死の情報を得ようとした。その海上での不幸な遭遇を遂げたのが、親世丸とその船長の高田屋嘉兵衛だった。
- ゴローニンらは松前に護送され、投獄され、2年余に及ぶ幽閉中、襲撃事件はロシア政府の命令かの尋問を受けたが、一貫して政府の関与は否定。

北前船ロマン研究会

25

### 嘉兵衛は1人でゴローニン事件を解決

- ゴローニンの交換の人質として拿捕された嘉兵衛ら5人は、ロシアのカムチャツカに連行された。直前に嘉兵衛は弟や幕府に手紙を書き、拿捕の経緯（行方不明でも、密航ではない）を説明し、家族の身を案しながらも、交渉に向かう決意を表明した。
- 連行され、絶望の淵にあっても、嘉兵衛は単なる会話からロシア語を覚え、リコルドとの間に、人間はわかり合えることを訴え続けた。
- 日本側は襲撃事件が、ロシアの日本侵略の前触れの行為かと疑っている。国王の指揮の下で行われてなければ、オホーツク長官から日本に対する現状をもらつてほしい。その謝罪状と嘉兵衛を帰国させてもらえれば、命をかけてゴローニンらを釈放させるべき奔走する。
- リコルドは理解し、友人であるゴローニンの釈放ができると信じ、動いた。その結果、事件は解決の方向に向かう。
- 1813年9月に箱館で、ゴローニン事件は平和裏に和解し、円満に解決した。
- 嘉兵衛はたった一人で「民間外交」を展開し、難しい国際紛争を解決した。

北前船ロマン研究会

26

### ゴローニン事件解決後の高田屋のその後

- ゴローニン事件の解決で、ロシアは通商交渉を求めるだけで、蝦夷地を領地化のため襲撃する意思がないことが判明した。
- 幕府側は莫大な警備の出費の解消のため、1821年に蝦夷地直轄を終了し、松前・蝦夷地一円を松前藩に復領させた。
- 嘉兵衛は同年**蝦夷地常雇船頭を免ぜられ、高田屋は1822年に松前藩用達となり、本店を兵庫津から箱館大町店に移転させた。**
- その後の嘉兵衛は健康を害し、1818年に弟の金兵衛（養子）に高田屋の跡目を継がせ、1819年に隠居し、郷里的淡路島に帰り、1827年に59歳で死去。
- 嘉兵衛の死去と、直轄化の終焉で高田屋は幕府の後ろ盾を失い、1831年に、金兵衛の雇船の栄徳新造（船名）がロシア船と密貿易をした疑いを持たれ、1832年に金兵衛及び船頭・表役の3人が入牢となり取り調べをうけた。
- その後、密貿易の事実は認められなかつたが、1833年に松前藩は高田屋金兵衛を閑所にし、高田屋の持ち船を全て没収した。

北前船ロマン研究会

27

### 語り継ごう高田屋嘉兵衛の北前船ロマンを

- 1799年の幕府の蝦夷地直轄化から、1822年の直轄終了までの間に、民間人の高田屋嘉兵衛が拠点島で奮闘し、ゴローニン事件を解決した歴史的成果は、ロシアが拠点島を日本の領地として正式に認めたことだった。
- 1854年の日本の開国で、1855年2月、日本とロシアの間で「日露通好条約」が結ばれ、下田・箱館・長崎を開港し、両国国境を拠点島とウルップ島の間と定めた。樺太については国境を定めず雑居地となつた。
- その後、時代は経るが、大東亜戦争に敗北後の1951年のサンフランシスコ講和条約でも、拠点島までの北方4島は日本の固有の領地として世界から認められた。
- 現在はロシアによる不法占拠中で、拠点島を日本の領土とするために奮闘した高田屋嘉兵衛が果たした北前船ロマンを語り継ぎましょう。

北前船ロマン研究会

28

（注）約90分にわたる講演に使われたパワーポイントの中から12枚を抜き出して掲載しています。

<https://www.eonet.ne.jp/~nakayamahisanori/index.html>

### □質疑応答と意見

- 高田屋嘉兵衛の出身地の淡路や函館などには、高田屋嘉兵衛資料館や記念館などがあるが、本店が置かれた神戸（兵庫津）には何もないし、彼の活躍はほとんど知られていない。もっと評価してよいのでは。  
→その通りで、顕彰していくべきだと思う。工樂松右衛門の店（「御影屋松右衛門」本店）のあった場所がわかったが、跡地の表示もない。これは行政にも働きかけているところ。
- 西出町に地域の方と神戸市が小さな高田屋嘉兵衛の資料館や記念碑をつくったが、PRできていない。
- これだけの壮大な物語なのだから、NHKの大河ドラマにしたらいいと思う。
- 司馬遼太郎『菜の花の沖』を原作とするNHKのドラマ（5回シリーズ）はあった...
- 北前船ロマン研究会のホームページをみると膨大な著述に驚く。出版したらいいがでしょう。  
→出版してくれるスポンサーがいればそうしたいのだが。 (文責 大塚)

ヴィンテージタウンをめざして～まちを住み熟（こな）す～

西神ニュータウン研究会

<http://seishin-ntken.net>